

はじめに

Foreword

佐藤宏之*

Hiroyuki Sato

本報告書は、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構に所属する総合地球環境学研究所（以下、「地球研」）において企画された平成18（2006）～22（2010）年度プロジェクト研究5-3『日本列島における人間－自然相互関係の歴史的・文化的検討』（プロジェクト代表者：湯本貴和・地球研教授）の中に組織された地域研究の一環として行われた。そのテーマは、「環日本海北部地域における後期更新世の環境変動と人間の相互作用に関する総合的研究」（研究代表者：佐藤宏之・東京大学教授）（略称「サハリン・沿海州班」）であり、本報告書は、2007・2008年度に北海道幕別町忠類晩成所在のナウマンゾウ化石出土地点において実施した地質学的再調査の結果を中心にまとめたものである。以下調査に到る経緯について、若干述べてみたい。

地球研で企画された本プロジェクトは、現在日本列島で惹起している種々の環境問題に対し、単に臨時的な解法を模索することによって解決することを目指しているわけではなく、過去日本列島およびその周辺地域で展開された人間活動と自然環境の相互関係の歴史の中に、自然の「賢明な利用」、あるいは「非賢明な利用」の痕跡を探るプロセスを通じて、問題系の本質と複雑性や多様性を浮彫させることを共通の研究目標に設定している。サハリン・沿海州班は、日本列島北部を含む環日本海北部地域における最初期の人間活動と自然環境の相互関係をより具体的に整理し分析を加えることによって、今日環境問題と称されるようになった過重な人間活動の負荷の歴史的な形成過程を、人類生態系をキーワードとして、その遡源の姿形にまで遡って追求することを目的としている。

後期更新世（12～1万年前）の北海道は、今日の列島の姿とはその地理的特徴を大きく違えている。氷期の海水準の低下により、サハリンとともに大陸から南に張り出したひとつの半島（古北海道半島）を形成していた。一方本州以南では、今日の瀬戸内海は形成されておらず、本州・四国・九州がひとつの島（古本州島）を形成していた。この地理的特徴は、後期更新世における人類の文化活動にも大きな影響を与えており、古北海道半島は、大陸の文化動態と密接に連動し、古本州島とは異なる文化動態と変遷のプロセスを有していた。従って、後期更新世における北海道の人間－自然相互作用の研究は、当然、サハリン・沿海州を視野に収めた研究でなければならない。

サハリン・沿海州班の研究計画は、主として動物相を担当する部門、同植物相部門、それに同人類活動部門の3つの研究分担から構成されている。これらの部門は各々独立して研究が進められているわけではなく、相互に密接な連携を図り

ながら研究を進行させている。その研究成果のひとつとして、北海道の後期旧石器時代後半期（2.5～1万年前）の成立プロセスに関する研究がある。古本州島の後期旧石器時代後半期は、同前半期から続く基部加工石刃尖頭形石器・ナイフ形石器群から構成されているが、一方北海道のそれは、北方大陸系と推定される細石刃石器群によって構成されるという対照的な文化の違いを見せている。相対的に温暖な傾向をもつ気候下のMIS3後半段階に相当する後期旧石器時代前半期（4～2.5万年前）の北海道は、古本州島と同様に、南方系の台形様石器と基部加工石刃尖頭形石器群が卓越していたが、最終氷期最寒冷期のMIS2に相当する同後半期になると、古本州島とは異なり北海道は、南方系の石器群から北方系の細石刃石器群に劇的に交代する。その理由は、マンモス・ステップを含む寒温帯森林植生が成立したことにより、シベリア方面からマンモス動物群が北海道に南下し、それに伴い北方系細石刃集団も南下したためと推定される。従って、当時の北海道では、マンモス動物群系の大型動物を主要な狩猟対象とした集団が占拠していた可能性が高い。一方、前述の後期旧石器時代前半期は、相対的に温暖な気候環境下において本州系の石器群が卓越していたが、この頃の北海道には温帯系のナウマンゾウを伴う動物群が主として分布していた可能性が高い。南方系の台形様石器と基部加工石刃尖頭形石器群を保有していた当該期の集団は、これらの動物群を主要な狩猟対象としていたのであろう。

このように、北海道の後期旧石器集団の生業・行動戦略は、主要な動物群の交代と連動した対自然環境適応システムとして機能していたと想定可能である。従って研究の課題は、往時の自然環境と人間活動の応答システムをより具体的に解析することにある。

そのような折り、1969年に発見・調査された著名な忠類産ナウマンゾウ化石中にマンモスゾウの下顎臼歯が含まれている可能性が見いだされたため、北海道開拓記念館等の関係諸機関と図り、地質学的観点を中心とした再調査を企画した。調査の目的等の詳細は後述するが、そもそもナウマンゾウとマンモスゾウは、その棲息環境が相当に異なると予想されるため、両者の産出層準の年代を決定し、気候・自然環境等の資料を獲得することは、日本列島への動物群の渡来と人類の移住の問題に対する基礎資料としてきわめて重要である。さらに、そうしたデータは、後期更新世におけるマンモス動物群狩猟民であったはずの細石刃石器群集団の生活・社会を分析するうえで、重要な知見を提出すると考えられる。本報告書は、こうした問題群に対する基礎資料を提供すると確信している。

*東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室

Department of Archaeology, The University of Tokyo



写真 1 : 2007年10月の調査のために削った露頭面



写真 3 : 2007年10月調査の掘削孔

東側から望む。写真 1 の下部の掘削孔をさらに深く掘った状態 (赤井文人撮影)



写真 4 : 2008年 8 月調査の掘削孔



写真 2 : 2007年10月の調査位置

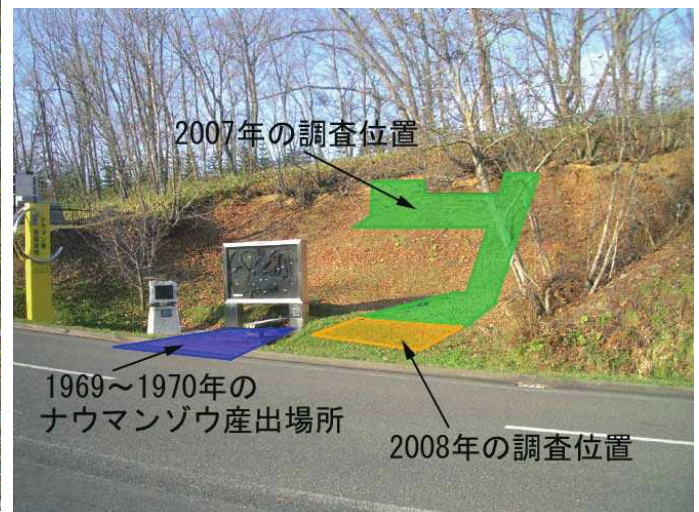


写真 5 : 2007年, 2008年の調査位置とナウマンゾウ化石が発掘された場所